

「育ちのための表現」

東京家政大学 教授 岡田京子



新型コロナウイルスの影響で、休校から始まった今年度も早いもので 8 か月経ちました。私も文部科学省から大学にうつり、8 か月です。前期はオンライン授業でしたが、後期は対面授業で学生に直接会えるようになり、やっと大学の教員になったことを実感しています。

昨日、久しぶりに小学校での図画工作科の授業を見てきました。机の中央に飛沫防止の透明シートが貼られている中での学習ですが、そのシート越しに作品を見せ合ったり、シートに絵の具のパレットを立てかけて使いやすい状態したり、子供なりに工夫して活動していました。それ以外はいつもと変わらない状況に感じたのですが、それは先生方のご尽力のたまものです。自分の健康や子供の健康に留意し、この状況でできること、できないことを随時判断しながら、充実した学びの場をつくりあげていく。それは相当大変なことです。しかも、新学習指導要領の全面实施と重なりました。「保護者から、通知表の○の数が少なくなったと問い合わせがあり、4 観点から 3 観点になったことを説明して納得してもらった」という先生の話も聞いたことがあります。外からは見えないご苦労があるのです。

このような予測もできない状況にも負けない、そしてみんなで乗り越えていく、体も心もたくましい、コミュニケーションのとれる学生を育てていくことが大切なのだろうと改めて感じています。



さて、私の勤める東京家政大学には、児童学科と児童教育学科があり、それぞれ幼稚園教諭、保育士、小学校教諭の免許が取得できます。私の所属する造形表現学科では、中学校と高等学校の美術の免許が取得できます。

その造形表現学科の中に新たな領域として、一昨年度「表現と社会」が立ち上がりました。「表現と社会」は、〈描く〉〈つくる〉に加え、〈人とのつながりの中で造形表現をいかす領域〉です。主に、造形表現を社会に活用していくための科目を学びます。

私はその中の「育ちのための表現」という分野を担当しています。（「表現」とありますが、そこに「鑑賞」も含まれています。）そこでは、学校の内外を問わず、乳幼児から18歳までの幅広い育ちの現場において、子どもに関する知識と理解を備えた造形表現者として、人の育ちをサポートできる人材を養成していきます。学生は教員志望の学生だけではありません。「育ちのための表現」に興味をもった学生が現在100人ほど受講しています。



私はもともと小学校教諭で、文部科学省でも小学校の図画工作科担当でしたので、主に小学生を対象に関わってきました。しかし、幼児教育の方からも声をかけていただき、大変多くの実践や研究を見る機会をもつことができました。さらに、中学校の授業も拝見させていただき、学校種を問わず子供と関わらせてもらいました。

その中で、幼小連携、小中連携の重要性、さらに言うところ、子供の成長を長いスパンでみていくことの重要性をひしひしと感てきました。先生方にも目の前の子供の「今」を見つめつつ、「これまで」と「これから」にも考えていく必要があることを講演の中で話してきました。

しかし、話すのは誰でもできる。ということで、実際にそれをつないで考えていく場に身を投じてみました。想像以上に学ばないといけないことが膨大にあり、今は、幼稚園や保育園など、それぞれの先生方から話を伺いながら、さて、どのように人の育ちに造形活動がいかに重要かを伝えていくのか、人の育ちを造形的な側面からサポートできる人材をいかに育てていくかを日々考え続けています。

講義では、ずっと幼いころから造形に関わってきたのだということを実感するために、1年生は、これまでの造形との関わりについてレポートを書きます。基本的に造形表現学科を選んでいる学生なので楽しい、嬉しい思い出が多いようです。感心するのは、鑑賞教育の充実です。授業で見た作品について書かれているレポートが多くあります。

しかし、「小学校1年生の運動会の絵で紅組の帽子をピンクのクレヨンで描いたら、先生が赤に全部塗り直した。あれはショックだった。」という悲しい出来事系の話題もあります。

それから、「自分の書いたレポートを見たら、褒められたとか賞に選ばれたとかばかり書いてあって、そういうのは何か違うのではないかと思い始めた」というものもありました。他者からの評価が基準となってしまう今の自分に疑問をもったようです。

学習指導要領でも、「主体的、対話的で深い学び」において見通しと振り返りについて示されていますが、大きなスパンで振り返ることも重要なのだと感じています。

実習では、後期は幼児期の造形活動を、自分たちで企画し、それをお互いにやっています。活動してから理論を学ぶというスタイルにしてみましたので、本当に様々な意見が出てきます。教員を目指している学生ばかりではないので、なおさらです。

粘土を使った活動をしたというグループの話の話を聞いていると、私が「遊びを通して学ぶ」「楽しくなきゃね」と力説しすぎたのか、子供に受ける（キャッチーな）活動をさせよう、子供が喜びそうな流行のものをつくらせよう、しかもみんな同じものをつくらせようという話になっていました。いわゆる「指導者が～させる」です。

しかしだんだんと「本当に子供はそれつくりたいかな」という学生の言葉をきっかけに、粘土に触れることが大事で、そこからつくりたいものがそれぞれ生まれてくる、そういう活動のほうがいいのではないかという話し合いになっていました。「子供が～する」です。

まだまだ「何か作品をつくる」というところからは離れないのですが、遠回りしながらも、幼児期の子供の表現とは？そもそも表現って？と、自分たちから迫っていく姿を見て、必要な遠回りもあるのだと感じています。どの校種においても、知識や技能の習得も必要だけれど、自分から考え、学ぼうとする学生を育てる学修の場を意図的につくる、しかも学生同士がともに学ぶにすることが重要なのですね。



最近は「幼児がこの活動をしたらどうするのか見たい！」という声が多く上がっているのですが、まだまだ学生を幼稚園に連れていく準備が整っていないので我慢してもらっています。直接子供と関わる保育士、幼稚園の先生、学校の先生、そういう人を支える人、どちらも増やす必要があります。そしてなにより、子供の成長を見守ってくれる大人が世の中で増えると子供は幸せに生きられる。そう信じながら、学生とともに、遠回りも楽しみながら、やっていこうと思っています。